

自然誌 だぶり 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 72号

2007年 6月

カノコソウの発見

5月19, 20日に津市美杉町で行われた生物調査に参加しました。植物班のメンバーは市川正人さん、佐野順子さん、山本和彦さん、山脇和也さんと山路でした。調査をしているうちにカノコソウ *Valeriana fauriei* を見つけました。カノコソウは、長野県などではよく生えていても、県内ではそう見かける草ではありません。三重県レッドデータブック2005植物では絶滅危惧 I A類にランクされ、鈴鹿山系藤原岳に生育していることと、尼ヶ岳で約50年前に採集した標本が残っていることが書かれています。貴重な植物の発見に、みんなも感激しました。もう50年近くになりますが、以前に美杉町でオキナグサを見たことを思い出しました。今は津市ですが、美杉はやっぱり山里なんですね。他にも、レッドデータブックの現状不明種のオニナルコスゲの群落があり、なかなか収穫の多い調査となりました。



カノコソウの頭花と茎葉（茎葉は2007年5月19日、頭花は同26日、津市で撮影）

〈山路武夫：松阪市大黒田町318-2〉

2006年度池干しによる外来魚駆除作業を終えて

石 田 洋

はじめに

三重県では野生生物との共存共生を目指してさまざまな取組みを行っていますが、最近では野外に定着した外来生物による問題が大きな課題となっています。水辺の生き物に関していえば、例えば農業用ため池に放流された外来魚により、長い年月の間に形成された地域特有の環境が破壊されるなど生物相の様子が随分変わってしまった例も多いことは周知のとおりです。今やオオクチバスやブルーギルは県内ほぼ全域に広がり、さらに最近では新手のコクチバスの密放流やアリゲーターガーの遺棄などが見られ（写真1）、状況は深刻化する一方です。



写真1 左からブルーギル、コクチバス、アリゲーターガー

このような密放流に対し行政は法律や条例による規制を設けてはいますが、すでに定着してしまったものについては規制が及ばず、対応は自主的な判断に委ねられています。県内でも必要に応じて利水組合（ため池管理者）やNPO等による防除が行われており、時には行政と共同で作業を行うこともあります。

今回は、このうち昨年の夏に利水組合と共同で行った池干しによる駆除についてご紹介します。

池干しによる外来魚駆除

(1) 経緯

本来、ため池は管理者の責任のもとに適正な管理が行われているものですが、勝手に放流された外来魚にまでは手がまわらず放置されているケースが多くあります。ある意味やむを得ない話ではありますが、外来魚のさらなる拡散や希少種への圧力が懸念される場合には早期の対策が必要であり、今回もそのような池に対して利水組合とともに対応を検討しました。

(2) 駆除の手法の検討

駆除方法には、池干し以外にも釣りや刺し網、地曳き網、さらには人工産卵床に誘因する手法など、数多くの選択肢がありますが、いずれも専門知識と道具、人手と時間が必要となるうえ、取りこぼしの発生は避けられず、完全駆除までに多くの時間を要することが予想されます。効率性、確実性からみてベストの方法は、農閑期に池の水を全て抜いて1週間ほど天干しを行うことと考えられますので、

下流への魚の流出防止策を検討したうえで（写真2，3），利水組合との調整を行いました。



写真2 左はバーベキュー網とネット袋，右はコンテナとネット袋を利用

(3) 利水組合の反応

当然のことながら，来春の営農期までに水が溜まらなかった場合の不安や補償問題等の話が出ています。ここでは詳細なやりとりには触れませんが，最終的には防除の意義について関係者のコンセンサスが得られ，水が溜まらないなどということのないよう，過去の池干しを踏まえた水抜き期期の目安や注意点など，多くの貴重なアドバイスをいただくことができました。

利水組合との話し合いでは，これ以外にも見回りの頻度，台風等の緊急時対応，資材の準備と確保，在来魚の取扱い，外来魚の処分方法，水が抜けきらなかった場合の対応など，多くの調整事項がありましたが，対等の立場で協力し合うというスタンスのもと役割分担を一つ一つ詰めていき，結果として望ましい協力体制が築けたのではないかと考えています。



写真3 ブルーギルの幼魚が多く捕獲され，拡散防止に効果が認められた。

(4) 作業時のトラブル

概ね計画どおり作業を進められました，やはり予期せぬ問題も幾つか起こりました。一つはコンクリート柵が詰まり水が流れなくなったことです。この時はポンプで柵内の水を汲み出し，残った泥を人力で撤去しただけで水の流れが回復しましたが，万一，樋管の中まで泥が詰まっていたらそうはいきません。農業に詳しい方によると，ある程度水が減った段階で樋管の中にロープを通し，泥を掻き出せるようにしておくべきだったそうです。

もう一つは部外者による妨害と思われる行為がありました。他県でも流出防止ネットをはずされたり，看板を壊されたりする例がありますが，いずれも早朝か夜半に行われたようです。今回の妨害行為についても県警本部に出向き相談しましたが，引き続き連携を密にしていきたいと考えています。

(5) 池干しの結果

最終的にすべての水を抜くことができ，当初の目的である外来魚の駆除を完了させることができました（写真4）。在来魚の生息状況は惨憺たるもので，大型のコイとフナがごく少数いただけでした。1週間ほど天干しをして万全を期したうえで水を溜め始めましたが，やはり水の溜まり具合は心配で，



写真4 水抜きが完了した池。底には軟泥が厚く堆積している。

大雨や台風が来るたびに不謹慎にも少し喜んでいました。現在は水位も回復し、外来魚の生息も今のところ確認していません。今後とも適切な管理や見回りにより、外来魚の違法放流が行われないように注意をしていく必要があります。

さいごに

今回は魚について触れましたが、水辺にはアメリカザリガニ、アカミミガメ、ウシガエルなど魚以外でも多くの外来生物が定着し広がり続けています。一昨年、外来生物法が施行され、この問題についてマスコミの報道や行政の啓発活動が繰り返行われましたが、同じ外来生物といっても、外来魚はアライグマやヌートリアのように家屋侵入や農作物食害など人の暮らしに直結する被害を及ぼさないためか、最近はまだあまり注目されることが少なくなってきたように感じています。

多くの方々にこのような水辺の現状に目を向けていただき、外来魚駆除のためだけの池干しなど行わずに済むような日がくればと願っています。

〈いしだ ひろし：三重県自然環境室〉

三重県におけるワカウラツボの新たな産地

中 野 環

ワカウラツボ *Iravadia (Fairbankia) sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954) は和歌山県三葛を模式産地とする貝です。この貝は1933年に坂口総一郎らが初めて採集し、黒田徳米と波部忠重により記載されました。記載以来、長らく採集されることがなく幻の貝とよばれてきました。模式産地以外では三河湾から有明海にかけて分布し、主に内湾や河口部のアシ原の発達した泥干潟に生息します。殻の大きさ5mm、赤褐色をした殻を持つ貝です。本種に似た貝でカワグチツボ *Fluvingula nipponica* Kuroda & Habe, 1954とは、臍穴がなく、殻が厚い点で区別できます。

ワカウラツボの生息域は、私たちの生活の場に迫っていることから、環境変化や水質悪化の影響を受けやすいので、各地のレッドデータブックで危惧種として取り上げられています。和歌山県(2001)では絶滅危惧Ⅰ類、愛知県(2002)や三重県(2006)では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

三重県での生息記録をみると、上島励氏により櫛田川で最初に採集され(木村, 1987)、その後、木曾川、長良川、揖斐川、相川、雲出川、櫛田川、祓川(木村・木村, 1999)、志摩市(中野ら, 2004)など県内各地から報告があります。本種は微小である上に、河口域の特異な環境に生息するので確認例は多くはありませんでした。今後、調査が進めば、多くの場所に生息することが明らかにされると思います。

三重県レッドデータブック2005の印刷中にワカウラツボの新たな産地を確認しましたのでデータを示します。データ①については、既に同書の391頁に示したものですが、データが間違いであることに気づきましたので、訂正して再度示します。

ワカウラツボ確認記録

- ① 2005年8月24日 明和町八木戸
- ② 2007年5月21日 松阪市松崎浦町



写真1 ワカウラツボが生息する近くにはハサミシャコエビの巣穴がある

最後に、ワカウラツボはハサミシャコエビの巣穴を利用して移動や生活をしているのではないかと考えられています(室原, 2000)。今回、確認したいづれの生息地でもワカウラツボはハサミシャコエビの巣穴の近くで見られました(写真1~3)。



写真2 石を這うワカウラツボ



写真3 殻口方向から見たワカウラツボ

引用文献

- 愛知県. 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち動物編, 愛知県環境部自然環境課. 名古屋: 596pp.
- 福田宏・前田和俊・河辺訓受. 1990. ワカウラツボの瀬戸内海での産出と種名. 南紀生物, 32(2): 103-108.
- 木村昭一. 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. 南紀生物, 29(2): 95.
- 木村昭一・木村妙子. 1999. 三河湾および伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
- 三重県. 2006. 三重県レッドデータブック2005動物. 三重県環境保全事業団: 498pp.
- 室原誠司. 2000. 大分県及び福岡県周防灘沿岸から産出のワカウラツボ. 九州の貝, 55: 39-42.
- 中野環・中優・帝釈元・岡由佳里・芦刈治将・上野早苗. 2004. 英虞湾における注目すべき貝類および甲殻類の記録. 三重自然誌, (8/9/10): 33-37.
- 和歌山県. 2001. 保全上重要なわかやまの自然 和歌山県レッドデータブック. 和歌山県環境生活部環境生活総務課: 428pp.

〈なかの たまき: 度会町大野木1711-1〉

ムクドリがやってきた

中 優

6月17日、夕方の散歩を終え自宅前に戻って来たとき、頭上の電線に餌をくわえたムクドリを見つけたのでどこへ行くのかとじっと見ていた。実はこれまで道路向いのお宅の屋根裏にムクドリが巣をかけたことが何度かあって困っていたので、同じような被害のお宅があれば早い段階で連絡してあげなければと思ったからである。そうしているうちに、ムクドリは飛び立ち、こともあろうかわが家の屋根へ侵入していったのである。そして少し時間をおいて、あのヒナに特有の鳴き声。正直なところ、にわかには信じられなかった。というもわが家の屋根は写真1にあるように陸屋根と呼ばれる屋根が平たくて屋根裏のないタイプであり、巣をかけるスペースなどはないと思っていたし、また雨風が入り込まないような対策、つまり野鳥の侵入が防げる対策が講じられていると信じていたからである。うかつであった。ヒナの誕生前であればそれなりの対応もとれたのに、後悔の念が押し寄せてきた。振り返ってみれば2階のテラスには、少し前から枯葉や木の実の種などの汚れが目につくようになっていたのに。



写真1 巣をかけた屋根

親鳥が飛び立った後に屋根に登って調べてみると、折板と呼ばれる屋根材の凸部の上部に7cm四方程度の空間があり、ここを出入り口とし、そこに続く庇の細長い空間に巣を作っていた。庇の底にある隙間から確認できる巣材の範囲は90cmに達していた。先のお宅から伺った話では巣は一抱えもあるぐらい大きかったとのことであるが、わが家の巣も同じように大きいと想像された。

ただ、屋根に登ってわかったのだが、出入り口付近の屋根の汚れがひどくてそのまま営巣を継続させるわけにはいかないと判断し、翌日庇奥部の一部をはがし、ヒナおよび巣材を撤去した。幸いにもヒナたちは手の届く範囲にいたため5羽全部を撤去できたが、巣材はずっと奥にもあり全部の撤去は無理であった。

撤去したヒナは何らかの方法で処分することも考えたが、法にも触れるかもしれないので、とりあえず巣の再生を行うことにした。鳥類はヒナの段階になれば容易に子育てを放棄しないことを予備知識として知っていたからである。具体的には写真2のように撤去した巣材をプラスチックケースに敷き詰めた仮の巣にヒナを戻し、日光と雨を避けることができるように庭のサザンカの下に置いた。ほどなく親鳥は鳴き声でわが子を認識し給餌を始めたので安心した(写真3)。その後、近所のネコの襲撃から守るためにサザンカの中段に仮の巣を移した。留守中の大雨ではプラスチックケースへの浸水が激しくて成長の遅い1羽が水没して死にかけたため、最終的には写真4のような形に落ち着いた。

振って沸いたような出来事であったが、ヒナたちは順調に成長し、6月30日時点で4羽は巣立ちしていった。

なお、今回の事件で起こったことや疑問点を次のとおり整理した。疑問点に関して御教示いただきたいと思っている。

1. 巣の撤去を行っているとき、親以外にも5羽程度のムクドリがやってきて電線で「ギャー、ギャー」と一緒に鳴いていた。ムクドリの場合、親以外も子育てに参加するのだろうか。

2. 孵化したヒナは5匹であり、そのうちの1羽は他よりも成長が遅かった。また孵化しなかった卵が3個あった。つまり8個産卵したことになる。
3. 撤去できた巣材の量は30リットルのゴミ袋一杯ほどあり、材料はイネ科などの植物と綿状の合成繊維ほかであった。
4. 仮の巣をサザンカの下へ置いてから1時間程度で給餌を開始した。サザンカの中断へ移したときも同じぐらいの時間で給餌を開始した。
5. 天気のいい日の給餌は朝5時過ぎには始まり、夜7時半頃まで続くことがあった。
6. 給餌の間隔は、短いときには1～2分程度の場合があり、餌を採取する場所が近くにあるのではとも考えたが、あまりにも間隔が短いような気がして親以外の個体が給餌に参加しているのではとの疑問も生じた。
7. 給餌に至るコースは仮の巣の場所によって変わったが、いったん庭においてしばらく歩き回ってから仮の巣へいくことが時々あった。
8. 巣の給餌にきた親鳥は、時々糞を口にくわえ、外へ運んでいた。
9. 仮の巣の最終形の傘は当初赤地に黒い水玉模様であったが、なかなか給餌しないので青色の無地に変えた。この変更による成否は変更後ほどなく夜になったため検証できていないが、結果として翌日の朝早くから給餌が行われており、変更には問題はなかったと判断できる。



写真2 ヒナ（6/25現在）。

左から2羽目の下にもう1羽いる。右から2羽目が成長の遅い個体、左上はふ化しなかった卵で青緑色。



写真3 餌を持ってきた親鳥



写真4 仮巣の最終形。

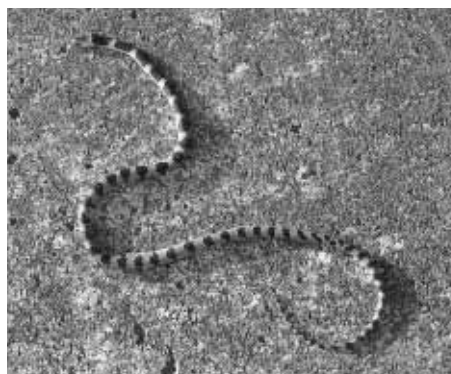
当初にプラスチックを置いたサザンカは右の木。

〈なか まさる：伊勢市小俣町〉

久居西鷹跡町でシロマダラ

2005年8月18日の早朝に、自宅前の道路上で死んでいるのを発見しました。全長40cmくらいで、白と黒の横縞が目立って美しい蛇です。現在地に住んで45年ほどになりますが、これを見るのは初めてです。

〈森脇武文：津市久居西鷹跡町〉



事務局から

イベントの紹介

私に関わっている夏から秋にかけてのイベントを紹介します。詳細が決まりましたらHP等で紹介しますが、興味のある方は日程を確保しておいてください。

ヒメタイコウチシンポジウム 9月9日(日) 桑名市

同市指定天然記念物「ヒメタイコウチ」の保全を考えるシンポ。豊橋市自然史博物館の長谷川道明さんの講演、愛知、岐阜、三重各県の保全活動の報告等があります。

オオサンショウウオの会「三重大会」 10月7～8日(日・月) 名張市

オオサンショウウオの会の第4回全国大会が、今年は伊賀で開催されます。7日は京都大学の松井正文さんの講演や各地の調査・保護活動等の報告が、8日は現地視察等があります。また、大会に先立って6日にはプレイベントも計画されています。

観察記録を残そう

本会は、博物館を盛り上げることと、三重の自然を記録していくことを目的としています。前者については、残念ながら相手方には迷惑がられていますので、後者を活発化していきたいと思っております。小さな記録を積み重ねていくことが、三重の自然誌解明につながります。身近な発見をぜひご投稿ください。

編

集

後

記

“たより冬号”が発行されていないので、のんびりしていたところ、この暖冬のせいも、冬も、“たより冬号”もいつのまにかやってきて、一気に過ぎ去ってしまいました。季節はもう梅雨です。今年の梅雨は晴天が続くかと思うと、いきなり激しい降雨があり、以前の雨の降り方とは、少し違ってきているように感じます。先週は度会町でゲンジボタルの観察を、また、浜島町でウミホタルの採集をしました。ゲンジボタルの観察は雨天の中、昨年より一週間遅れで行いましたが、多くの個体が乱舞していました。また、浜島町ではウミホタルを最初は、一人で淋しく採集していたのですが、時折点灯させるライトに刺激されたのか、浜に夕涼みにきていた小学生が沢山集まってきて、楽しく採集を行うことができました。子どもたちは普段よく遊んでいる浜にウミホタルがいることを知らないようでした。彼らの自然への興味や関心は非常に高いものでしたので、なんとかこの好奇心を消沈させることなく、育てていけたらなと思いました。私たちは身近な自然の情報を収集し、会員同士で交流することは勿論ですが、次世代を担う子どもたちのためにも、本会の目的である博物館施設等の整備に力を注がねばならないと改めて感じました。(たま)

自然誌だより72号

発行日 2007年6月30日

事務局 〒514-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp